

01 アジアコア冬の学校

本年（2014年）もアジアコア冬の学校（Asian Core Winter School）が賑々しく開催された。これは以前 JSPS のアジアコア事業として展開していた事業を分子研独自に発展・展開している IMS-Asian Core Program の中心的なアクティビティーである。日本、韓国、中国、台湾の4地域を代表する分子科学および化学系公的研究所IMS、KAIST、ICCAS、IAMSの連携を眼目とする本事業では、毎年一回の教育的ミーティング「冬の学校」を継続的に実施してきた。今回（2013年度）にも4研究機関の大学院生100名超に対し、同4研究所の教授、准教授を中心とした講師陣が24件の講演・講義を提供した。また

参加大学院生からは85件のポスター発表があり、またその中から9件のショートトークによる口頭発表がなされた。

講演・講義は分子科学に関連する多様な分野から提供され、聴講学生の科学的視野の拡充に大いに貢献し……、まあそんな真面目な話はべつの公的報告書にお任せしよう。なにせこの会合でいつも心に残るのは、ホストの先生方の心づくしのホスピタリティーである。今回も主催機関であった台湾・原子分子科学研究所（IAMS）を中心とするホストの皆様に大変お世話になりました。

中でも台湾大好きの大森教授など数名とともに「美味しいお茶」をどこで

買おうかと相談していたら、わざわざ車でお茶の名産地「猫空」まで連れて行ってくれて生産者に掛け合って「東方美人茶」などを試飲～購入まで面倒見ていただけただけことは望外の幸せ。至福のひと時を過ごさせていただきました。本当に楽しい滞在でした。

私自身は腰を痛めており、やや不本意な大人しい滞在となってしまいましたが、次回の本事業の開催地は岡崎。次回を取り仕切っていただく秋山教授などとともに、これまでお世話になってきた他の3機関の先生方になんとしても恩返しをしようと心に誓っております。

（魚住 泰広 記）

02 分子研国際インターンシッププログラム

分子科学研究所の教授・准教授の各研究グループは、助教1～2名、博士研究員1～2名、総研大生2名程度（実際はかなり偏りがある）からなる。また、他大学の院生が1名程度（実際はかなり偏りがある）、6ヶ月以上の期間、特別共同利用研究員（以前の受託院生）として研究に参加している。さらに、JENESISプログラムの外部資金を得て、ASEAN諸国から院生や若手研究者を広く募り、選考によって毎年10名前後受け入れるようになった。しかし、JENESISプログラムとして規定された滞在期間3ヶ月未満の条件は、研究に深く関わってもらうには短かった。総研大入学希望者の呼び水の要素

もあったもののこれまで数名の入学者に留まっている。外部資金が途切れた場合や対象国以外の院生を追加招聘する場合は分子研の国際共同予算を使い、JENESISプログラムの条件に合わせたEXODASSプログラム（代表者の櫻井准教授の命名）として継続実施した。これらJENESIS・EXODASS事業報告は毎年、櫻井准教授（この4月より大阪大学教授）が分子研レターズ誌上で行ってきたので、参照されたい。

2年前から分子研の国際共同予算で行う各種事業の見直しを開始した。従来の分子研国際共同（所内研究グループからの申請10件程度に対して年度初めに予算配分し、それぞれの状況に合わ

せて実施してもらう方式）は廃止した。院生、若手・中堅研究者、著名研究者の招聘はすべて随時受付に切り替えた。ただし、3ヶ月以上滞在する著名研究者は従来同様、外国人客員教授として雇用する。そして、院生に対しては分子研国際インターンシッププログラム（IMS-IIP）を戦略的に導入した。これまでJENESIS・EXODASS事業で評価の高かった東南アジア5校も今年度からIMS-IIPで対応するように変更した。

IMS-IIPの基本的な実施方法は以下の通りである。①協定先機関それぞれの実績に応じて、派遣期間（例えば、毎年6ヶ月）の権利（スカラシップ）を与える。このIMS-IIPスカラシップでは

成績優秀な院生のみを対象とし、一定の基準で旅費滞在費をカバーする。②各協定先でIMS-IIPスカラシップに対する応募者を募り、先方の責任で推薦候補を厳選してもらう。③分子研の担当世話人が、推薦された院生の基礎学力や適性はもちろんのこと、滞在希望期間・時期と希望研究室の都合などを調整して最終候補者を決定する。④派遣期間の権利をフルに使えない場合は、若手研究者に対象を拡大して補充の推薦を受け、選考の上、採否を決める。⑤実施後は、協定先機関や受け入れ研究室にアンケート調査し、改善点等があれば、適宜フィードバックする。

事後評価が低い場合は次年度募集するインターン生の派遣期間や人数を削減する。一方、事後評価が高い場合は先方の要望と国際共同予算額に応じて、派遣期間をのべ12ヶ月(2~3名)、18ヶ月(3~4名)と拡大する。例えば、フランスのENSCP(国立パリ高等化学学校。化学分野のグランゼコールではトップ校)では修士1年の3月後半~8月の5ヶ月間の海外研修が教育プログラム化されている。過去2年の実績から、分子研も先方も満足度が非常に大きいため、今年3月からは5名を受け入れ、さらに4月にはENSCPの校長の訪問までであった。これまで3年間で受け入れた10名は、調整の結果、受け

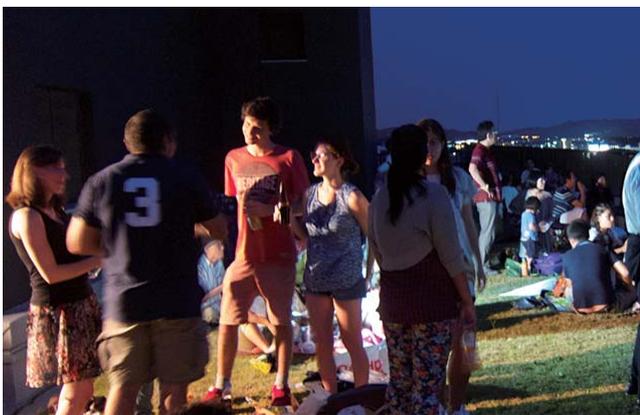
入れ研究室が偏らず、すべて異なっている。現在、さらに5年間有効な協定への更新を予定している。一方、6ヶ月のIMS-IIPスカラシップをそれぞれ提供することにしたタイのチュラロンコン大学、カセサート大学、マヒドン大学、マレーシアのマラヤ大学、シンガポールのナンヤン理工大学、インドのIACS(科学振興協会)からは、この秋に最低1名ずつ、計8名の院生・若手研究者を受け入れることになった。なお、チュラロンコン大学とナンヤン理工大学はこの2月、3月に分子研で研究者同士が交流する機会を持った。IMS-IIPが定着し、質の高い国際共同研究に発展することを願っている。

IMS-IIPスカラシップは協定を締結した各機関に限定したものであるが、広義のIMS-IIPでは、協定の有無に関わらず、外国人客員教授が長期滞在中に院生や若手研究者を呼ぶ場合にも随時対応できるようにした。また、従来のような個人のチャンネルを通じて、海外から院生や若手研究者を随時受け入れることもできる。ただし、この場合は、必要に応じて応募者の資格審査をして受け入れるかどうかを決める。なお、院生で6ヶ月以上の滞在希望者はIMS-IIP枠外となるため、国内の他大学の院生と同様、特別共同利用研究員として審査し、採用されたら大学院関係

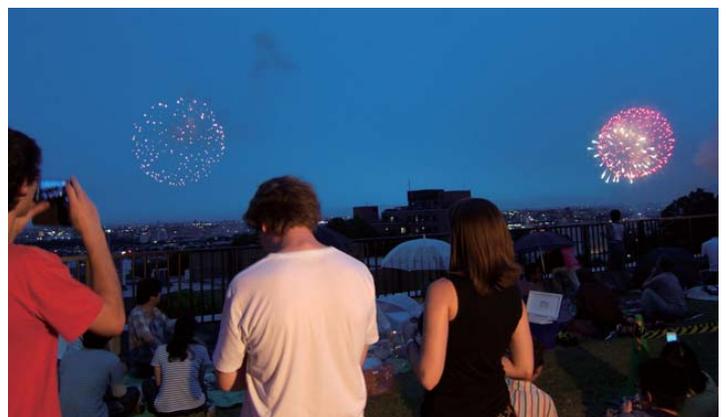
の予算を使ってRA雇用される。滞在費支援は6ヶ月未満と6ヶ月以上で大きく変わらないように調整可能となっている。

以上のようなIMS-IIPを含む国際共同事業全体を統一的に実施していくために専任の事務支援員を昨年2月より雇用している。これによって、分子研に滞在する院生や研究者に関わる諸手続き(招聘状作成、ビザ取得準備、ロッジの確保、来日時の世話、滞在費支給、滞在中の諸問題への対応など)がワンストップでできるようになった。さらに最近、UVSOR施設で海外からの共同利用者が急増しており、これを契機に海外からの施設利用も活性化するための諸手続きの集約化も図りつつある。国際化の強化は、昨年スタートした研究力強化戦略室(分子研レターズ前号参照)の目的の一つである。今後も、受け入れ研究室・研究施設の負担を軽減するとともに、海外からの多様な要望にも応えられるようなワンストップ体制を整備していきたい。

(小杉 信博 記)



参加者約200名中50名以上と外国人が多かった今年の分子研岡崎花火鑑賞会の様子。



岡崎の花火を鑑賞するインターンシップ生。